
蛙くと過ごした日

森かえで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛙くんと過ごした日

【Nコード】

N9463A

【作者名】

森かえで

【あらすじ】

全然違う二人、でも孤独だつて乗り越えられた。あの空間で、本当に貴重な出会いをした。幸せなつながり方をした。あの心地よさ、きつと忘れない。タイトル変更しました

(前書き)

ここでは、蛙が重要なキャラクターとして登場します。別段、特殊な表現はしておりませんが、もし「蛙なんて想像するだけでゾツとする！」という方がいらっしゃったら読まないほうが良いかもしれません。

お風呂の中には、湿気。梅雨の時は、ほんつとに嫌いだったのにな。しとしとじめじめ、毎日うんざりしてた。今はぼわつとして、心地よい。肌に髪に頭の中に、水分がしっとり浸透していくような気もしてる。だから、いつもより頭が柔らかくなって感じる。お風呂の中では、テレビは見れない、音楽は聞けない。だからといって本は読まない。ただひたすら考え事をするようにしてる。

今日は 孤独 について考えるようにしてる。きっと今日は、いい具合に考えが巡ってくださろう、晩ご飯もハンバーグだったし。

しかし、しかしだ、さつきから気になっているんだ。窓の外の蛙くん、君だよ、君。

やもりでもないくせに、ガラスにへばりついて這いまわってる。虫を探してるんだろうな。でっぴりした胴体はよたよたして、危なっかしい。そうだね、ビールっ腹のオジサンみたいだ。

そんな君の ビール が、ほら、おいでなすったよ。小さい蛾、ちようど君から見て右にいる。

あ。素通りしちゃった。

虫を探してるわけじゃないのかなあ。じゃあ何してんのかな。こっちに来たい、の、かな。

そっか、最近日照り続きだったもんね。湿気も欲しいよね。

洗面器に水を張る。蛙くんの身体に悪そうな、シャンプーやボデーソープなんかのボトルは脱衣所に移す。

窓を、細く開ける。

どうぞ。 おじやまします。

私と蛙くんの視線が、ふんわりとからまる。そして蛙くんは、ぬこぬことお風呂場の中に入ってきた。

蛙くんは今、洗面器のプールで泳いでる。その水泳フォームはまるつきり平泳ぎ、ではなく、少し違うように見える。私たちが泳ぐときはいち・に・さん、と頭の中で拍子をとるけど、蛙くんの泳ぎではきつと、そんなカウントがないんだろう。

ああ、久しぶりでず、気持ちいいです。
そう、よかったなあ。

きれいな黄緑色の背中を眺めながら、そう答える。
けど、実は今、孤独だな、と感じてる。

孤独って、周りの人と仲がよくなるとき感じるものだって、そう思ってた。けどもしかしたら、そうじゃないのかもしれない。

蛙くんが泳ぐ。飄々とした顔つきで水の上をすいすい渡り、ときどき壁に手をつけて、ぷはっ、息を吐く。

その何気なさ、水に慣れきった様子。そして、それをバスタブの縁に寄り掛かってぼんやり見つめてる私。乗り越えられない違い、とでも呼べばいいかな。境界線がある、ってことを、強く感じる。近くににいるのに距離を感じてしまう。

私と蛙くんは、おなじものではない。私は蛙くんにはなれないのだ。違い、壁。仕様がなないけど、もどかしい。そして、怖い。どんなに足掻いても、一緒のことを感じたいと思っても、つながることのできない、分かち合うことのできない部分があるのだ。どうしても、客観視しかできない場面が存在するのだ。

でも。

蛙くんはしばらく泳いだあと、洗面器の縁にのぼって、くうう、とうなった。そして胸を膨らませ、こっ叫ぶんだ。

ああ、この湿気、水滴の心地よさ……

よみがえるような気分ですって、そう言うんだ。
私を感じてるのとおなじこと。

身体にまとわる蒸気の軽さ。しと肌の上を流れる小さな水滴、それが染み込んでびくびくと反応する身体の諸器官。一つひとつの細胞が伸びをする。

感性がリンクしてる。
心地、いいなあ。

蛙くんは、タオルでふいてくれないかと頼んできた。
それから、あなたが入りする大きな玄関でお別れしましょう。
窓から出ないの。

ここから直接出ると、また湿気が恋しくなりそうですから。
これからもときどき来ればいいじゃない。

蛙くんはぶんぶん首を振る。いやいや。湿気を愛する仲間はず
さんいるのです、私だけずっと利を得ているわけにはいきません。
じゃあ仲間も連れてきなよ。

一瞬のぐっとした沈黙のあと、蛙くんが私の目をしっかと見すえ
た。そして、大きな口を小さく開いて、絞りだすような声を出した。
いいですか。私たちは、野生動物なのですよ。大勢の仲間ととも
に、依存心を身につけて生活するなど、あつてはならないことなの
です。わかってください。

そうだった。おなじものでは、ないんだった。

孤独を覚える。私も、蛙になれたらな。おなじ摂理を、感じら
れたらな。

でも、それは乗り越えられない違いなのだ。

だけれど、私たちはその孤独を感じないくらいいつながり方をし
た、私はそう思ってる。

楽しかったよ。

私の手のひらの上、蛙くんは下を向いて押し黙ってる。電灯が熱
くまぶしく辺りを照らし、乾いた夜風がさらりと頬をかすめる。湿
気は儂く消えていく。

元気でやりなよ。

蛙くんはきつ、と顔をあげて私の目を見た。目が潤んでた。

一緒にあの空気を感じたこと、忘れません。

最後に残ってた、手のひらの湿気のひとかけに頼ずりをくれた。

そして、電灯の光が届かない漆黒の闇のなかに一跳びした。

ざざつ、大きな音のあと、かさかさ音が聞こえた。

明日からまた、私は湿気のなか、蛙くんは、この乾いた風のなか。

またいつか、会えないかな。無理かなあ。

蛙くんのぬくもりが残る手のひら、きゅうつと胸に当てる。二人

で感じてた、ふんわりした湿気。胸の奥に移ってく。

私も、忘れないからね。

しばらく夜闇を見送ってから、家の中に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9463a/>

蛙くんと過ごした日

2010年10月8日15時15分発行